

Kawasaki 美術館  
金山平三の世界



《晴れ》 1956-60 (昭和31-35)年 53.1×72.5cm 油彩・布 川崎重工業株式会社蔵

光に反応する海や浜辺の  
微妙な色彩が五感に響く

金山に限らず、風景画を鑑賞する醍醐味のひとつに、画家がその風景をどのように見、どのように認識し、そしてどのように表現したのかを探ることが挙げられよう。

この作品の場合、水平線が画面のほとんど上部に押しやられており、画家がかなりの高台から見下ろしていることがわかる。画面下、手前に描かれた家々の傾斜の浅い屋根は、簡潔でかつ力強い筆致での確に表現され、「晴れ」という画題にふさわしく、そこが強い日射しに満たされた空間であるようすがうかがえる。

しかしここで画家の心をとらえているのは、日光や雲を含む、光源としての空の描写以上に、その光源を受けた海面や浜辺の変化する、微妙な色彩の表現であろう。画面の半分を占める海の描写では、波打ち際の白波、次々と寄せる波のうねり、潮の違いによる色の変化が、画面に対して水平に賦彩された、ほとんど抽象的とも言える筆致によつて表現されている。にもかかわらず金山独自の広く深い視野でとらえられた風景は、ささ波の音や温度、潮の香りをも感じさせ、詩情豊かに眼前の世界を五感に響き渡らせている。

(兵庫県立美術館学芸員  
相良周作)

金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年(明治16年)神戸に生まれ、1964年(昭和39年)80歳で生涯を終えました。1909年(明治42年)東京美術学校(現在の東京芸術大学)を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年(大正5年)には、第10回文展に出品した作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を続け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)にすべて寄贈しました。

